

疎外概念の分類と限界

別 府 芳 雄

は し が き

ブラウナーは社会心理学的に疎外概念の理解を容易ならしめるために疎外概念を4つのパターンに分けたが、この分類を応用しつつ、その概念をより明解にしながら、現代産業社会における人間疎外を分析し、疎外概念の限界をみちびきたいと思う。

1. Powerlessness

ブラウナーは疎外を 1) powerlessness (主体と客体の分裂の型) 2) meaninglessness (部分と全体の分裂の型) 3) isolation (個人と社会の分裂の型) 4) self-estrangement (現在と未来の分裂の型) に分け、これらに共通することは、人間の物化、そして存在と意識における分裂だとしているが、この Blauner の分類にした題って現代産業社会の疎外状況を述べてみよう。(附表参照) 人間疎外の意味についてはすでに述べた如くであるが、要するに「人間自身の行為が彼にとって一つのよそよそしい対立的な力となり、そして彼がこれを支配するのではなく、これが彼を抑圧する²⁾」ということであった。いいかえれば主体としての人間が客体としての人間になりさがること、すなわち主体性を喪失して、ただの「物」となることを意味している。だから疎外の意識のなかには主体と客体の分裂の意識が含まれていて、そこからさらに主体性を奪還しようとする意識が生れる。Blauner は「疎外論は産業革命のインパクトが手工業者におよぼした結果にたいする知識人の簡潔な解釈を意味³⁾」すると述べ、この場合、非

マルキストのみならず，反マルキストすら工場技術・増大する分業労働，私有財産制度が労働生産物からの労働者の人間疎外をひきおこしたというマルクスの見解に対してはマルクスに従っているという。

マルクスは古典派経済学を最初に研究した成果である1844年の『経済学・哲学草稿』において，「わたしの結論が国民経済学への良心的な批判的研究にもとづく⁴⁾」と述べたのち，人間は近代市民社会においては，私有財産と自由競争という二大条件によって客観的に制約されているが，「国民経済学はこれらの本質的究明を証明していない」と国民経済学の限界を衝く。つぎに国民経済学的カテゴリーを受け入れた場合，まず現実から考えてみよう⁵⁾と述べ，まず「労賃は資本家と労働者の敵対的な闘争を通じて決定される」もので生産活動は本来他人を自己の生存のための手段として利用する利己的行為であるが，この場合「労働者は一個の商品となっておりしかも，もし自分を売りさばくことができれば，それは彼にとって幸運なのである。そして労働者の生活を左右する需要というものは，富者と資本家の気まぐれ (Laune) によって左右される⁶⁾」ものだ⁷⁾という。つまり労働者の生活は富者の移り気に依存している。「依存していることは無力を意識する」ことであり，資本家に依存せざるをえないことは，つまり労働者が powerlessness の状態におかれていることを意味する。「人間の自己疎外の直接に社会的表現としてのプロレタリアート」は人間がただの商品 (zu einer Ware) になるということであり，「労働が他人に売り渡される技術⁸⁾」⁸⁾ということは，人間が自分の労働を売って一定額の商品とか貨幣のなかに，その代償をのみ出すということであり，つまり人間の生命力の発現を死んだ物質に等置すること，つまり生命の高貴を物質の多寡に還元することにほかならない。そして人間が「生ける人間」と「死んだ人間(商品)」とに二重化し，主体性の分裂を意味する。かくて「労働者は精神的にも肉体的にも機械にまで下落せられ，ひとり人間から一個の抽象的活動 (eine abstrakte Tätigkeit) および一個の胃袋(ein Bauch)とな

る」⁹⁾もので、労働者のこのような立場は「工場制度において、その絶頂¹⁰⁾(Gipfelpunkt)に達する」のだと述べ結局のところ、Das+müßte sterben¹¹⁾とマルクスは結論したが、「労働が自分自身のものでなく、ある他人の事業における一つの勘定費目にすぎぬ¹²⁾」ということは powerlessness という意味における人間疎外なのである。食うこと、飲むこと、産むこと、というような動物的な機能においてのみ労働者は自分が人間であると実感することができるが、労働においては勘定費目 (business calculation) にすぎぬということである。つまり「動物的なものが人間的になって、人間的なものこそ動物的になる」わけであり、主体の客体化である。またもし「人間が人間であるのは、彼が自己のうちに品位をもち、またすべての他人のうちにこの品位を認める¹³⁾」ことであるとすれば、人間的品位 (die Würde des Menschen) の喪失となる。そして労働が「かれらのもとでは、自己活動のあらゆるみせかけを失ってしまい、ただ彼等の生産をみじめにすることによってのみ、これを維持するにすぎない¹⁴⁾」ということになる。つまり「生産をみじめにすることによってのみ維持するにすぎない」くらい powerlessness だということである。Blauner は「主体としての自己を主張できぬときには powerlessness だ」としたが、これはまさに powerlessness という以外はない。さらにマルクスは、資本と労働の分離、階級的対立が資本主義的人間疎外の根本原因であって同時に、この人間疎外によって、その前提条件たる階級対立そのものが維持され、かつ再生産されるのだという事実を強調した。

産業革命の到来とともに、高度に機械化された組織が職人的生産に代置き、職人は彼らの道具や材料の主人であることを止めた。現代の科学的・技術的発明は人間をして「それ自身の法則と運命をもつ新しい世界を創造した¹⁶⁾」のであり、人間はみずからの造った世界をみて「いや、すばらしい」という。たしかに現代は過去のあらゆる時代より進歩している。そして技術は空気と同じように、われわれが「それなしでは生きていけない」もの

となった。しかしその反面、人間の完成 (Vervollkommen des Menschen) からいよいよ遠ざかり、技術そのものは、それがどこへ導いていくのか (Wohin das führt?) 何のために人は生きるのか (Wofür man lebt?) さえも教えようとはしない。そして人間は「抽象的な存在」になり「精神上および肉体上の不具者」に変化させられていく。そして、ひとり「ヨーロッパにのみ」始まった技術は、あらゆる事物の徹底した合理化を通じて純粋な経験的科学・計画的に考案し絶えず前進する技術¹⁷⁾を生む。すなわち科学と技術はわれわれを魔術から解放し、世界は既に魔術から解放されたのである。ところが、この魔術からの解放は逆に「人間に精神盲をもたらした」¹⁸⁾のである。そして人間はただ一種類のものを作るだけの一個の精神なき「自働機械」になりさがり、働く人びとが「他の商品を生み出す商品以外の何ものでもない」ということによって、人間の本質を疎外され、かつそれが本来そなえているはずの目的意識性を抽象された、たんなる生理学的エネルギーの支出以外の何ものでもなくなる。近代工場においては知識や熟練は明らかに機械のなかに組みこまれつつ、いまや働く人びとにとってはルーチン・ワークしか残っていない。かくして現代産業社会においては産業の発展の結果としての「豊かさ」は現代産業社会そのものの基礎としての生産の社会的重要性・社会的意義を低下させる¹⁹⁾。ちょうど「ローマがフェレーロのいう《奢侈》(luxuria)、つまり快適さの過剰に」²⁰⁾うちのめされて「人間は観想的生活 (vita contemplativa) を」失ったように、「機械化の進む産業主義のもとにおける現代産業社会では……人間は物体に変貌し、その結果、人間は不安にみち、生命に対しては憎悪ではないにしても全く無関心」²⁰⁾となり、孤独と不安に駆られて間断なく仕事をすることによって「精神を集中した冥想の態度はもっとも高い活動であり、内なる自由と独立の状態のもとにのみ可能である精神の活動なのだ」²¹⁾ということをして忘れてしまう。ゆえに人間的生を失って「内なる自由」に対して powerlessness を感ずる以外はない。その意味において現代産業社会はみ

ずから築きあげたものによってみずから崩解していく。すなわち現代産業社会は「自分がよびだした地下の魔物を、もはや統禦しきれなくなった魔法使に似ている」わけで知識や技術的能力の面では進歩が行われて万人の所有物となったのに、「人間存在そのもの、人間のエトス、人間の善良さとか英知は何の進歩をもなさぬ²²⁾」社会なのである。シヤフはまさに私のいう疎外状況とは、と述べて次の如く論じている。すなわち「こんにちの際立った例をあげよう。人類の英才によって成された核分裂の発見とオートメーション化……同時に、しかし、それはある社会的条件のもとで機能すると、人類を全面的破壊をもって脅かしうることになる。これは疎外の古典的な例である。その脅威はこんにちすべての人に知られている」が「人類はこれまでに、かくも明白に、かつ悲願的に、かの魔法使いの見習いの役割を演じていることを自覚したことは一度もなかった。これがまさに私の²²⁾いう疎外状況である」という。繰返していうが、これは現代産業社会特有の苦悩を意味する。それは「知識や技術的なものや人間のあらたな可能性の条件であるところのものにおいてのみ進歩があるのであって、人間存在の実質においてではないのだ²⁴⁾」ということであり、人間の実質においてではないということは、人間は人間みずからの、このすばらしい成果にふさわしい人間存在にみずからを仕立てることに失敗したことになる。現代産業社会においては、人間は哲学することを失っており「夢遊状態の中での機械的な行使を人間に強いている」ものだがこの強制に対して現代人は powerlessness なのであって、ブラウナーのいう「人間がインパーソナルなシステムによって支配された対象ならば powerlessness²⁵⁾」とすれば、現代産業社会の科学・技術の強制に対して現代人は powerlessness という以外はない。

大塚氏は巧みに疎外の powerlessness の意味を説明している。すなわち疎外ということは群集のなかに巻き込まれた個人のようなもので、この群集の奔流のなかで人間は「自分はどうしようもない」と感じると述べた

が、この「²⁶⁾どうしようもない」ということは powerlessnessとい うことである。

注 1) Robert Blauner ; *Alienation & Freedom*, The Factory Worker and His Industry, Phoenix Books, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1964 P. 33.

Blauner は次のように述べている。Thus the four modes of alienation reflect different “split” in the organic relationship between man and his existential experience ; the subject-object, the part-whole, the individual-social, and the present-future dichotomies.

2) Karl Marx, Friedrich Engels ; *Deutsche Ideologie*, Dietz Verlag, Berlin, 1955, S. 29.

3) Blauner, P. 2.

4) K. Marx ; *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, (aus ; K. Marx, F. Engels Werke, Ergänzungsband, Erster Teil, Dietz Verlag Berlin, 1968, S. 467.)

5) *ibid.*, S. 471.

6) *ibid.*, S. 471.

7) Erich Fromm ; *The Art of Loving*, A Bantam Book, A National General Company, 1956, P. 38.

8) C. Wright Mills ; *White Collar*, The American Middle Classes, Oxford University Press, 1951, P. 14.

9) M. E. W., *Erg Bd*, S. 474.

10) *ibid.*, S. 474.

11) *ibid.*, S. 475.

12) Mills, *White Collar*, P. 12.

13) Karl Jaspers ; *Kleine Schule des philosophischen Denkens*, R. Piper Co Verlag, München, 1964, S. 59.

14) K. Marx, F. Engels, *Deutsche Ideologie*, S. 67.

15) Blauner, P. 32.

16) Erich Fromm ; *Psychoanalyse und Religion*, Diana Verlag Konstanz, Zürich 1966, S. 8.

17) K. Jaspers ; *Kleine Schule des philosophischen Denkens*, S. 22.

- 18) *ibid.*, S. 20.
- 19) フロムは現代産業社会とは知性化・定量化・具象化が特徴になっている社会だと指摘したのち、生産のための巨大なセンター・巨大都市・巨大国家においては、人びとはまるで物体のように支配されていて、人びととその支配者は物に変貌し、彼らは物の法則に従う。しかし人間は決して物ではないし、物になれば破滅すると指摘している。(Das Menschliche in Uns, Diana Verlag Konstanz, Zürich, 1968, S. 67)
- 20) Fromm, *Das Menschliche in Uns*, S. 8.
- 21) Fromm, *The Art of Loving*, P. 17f.
- 22) K. Jaspers; *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, R Piper & Co Verlag München, 1949, S. 311.
- 23) *ibid.*, S. 311.
- 24) アダム・シヤフ「疎外と社会行動」(『ディオゲネス』第3号、1969. 9月、大淵和夫邦訳、河出書房新社、49～50頁)
- 25) Blauner, P. 32.
- 26) 大塚久雄『社会科学の方法』——ウエーバーとマルクス——1966年、岩波新書、16頁以下

2. Meaninglessness

生産の合理化は全作業過程を極めて細分化した作業に分解してしまう。かくして、ほんの一握りの些細な操作に終始して、なんら責任を含まず、かつ工場内の全生産プロセスの理解を不可能にする。すなわち責任倫理・問題解決および意志決定は分業の制度化により、労働者から剝奪せられて管理者や技術者や幹部らの関与となってしまう。自己の労働において、個人として些細な接触でしかありえないということは「労働従事者から目的意識を奪うことはいうまでもない。このことは<無力さ>に加えて<無意味さ>という疎外を附加¹⁾する。強制された、つまり自発的でない労働においては「人間は他者の支配、強制、束縛のもと²⁾」にある。ところが人間は存在しているばかりでなく、自分自身の存在を選ばなければならないところの唯一の実存であり、「能動的な感情を行使するときは人間は自由で

あり、彼は自己の感情の主人である³⁾」とすれば些細な仕事に終始して、なんらの責任を含まざる仕事は meaningless⁴⁾ である。自然の一片を一個の完成品に仕立てるところに人間の権威がうかがわれたとすれば、いまや人間自身が機械の単なる附属品にすぎなくなっている。人間は自然の一片に自己の個性を吹き込む存在でなくして機械の必要をみたすところのある量と化す。「機械の一部または生ける機械」ということは、マルクスのいう「他律性と自由喪失」ということであるが、主体的な創造の喜びのないところに働く人びとは meaningless を自覚する。何故なら「われわれはもろもろの形象や形態を創造する《精神》であり⁶⁾」シェリングがいったように「人間は自己のうちに《創造への関知》をもつ⁶⁾」ものだからである。創造への Mitwissenschaft なくして労働は無意味である。ブラウナーは「個人の役割が組織の total system of goal に fit⁷⁾ しない」と表現したが、「メカニズムの一部にまで還元された」働く人びとは要するに代替可能な物にすぎない。もし生の1時間——すなわち、その人生の時間はすべて数えられているがゆえに、かけがえのない1時間を——取り返しがつかぬままに消費しているとすれば、——そして人間はわれわれに与えられているこの生が、空のものとして与えられたのであるから、人間はこれを満たし埋めていかねばならぬものとすれば、労働プロセスの間この生の時間は「満たしえぬ」「埋めえぬ」生の一駒であるから meaningless という他はない。

さらにいっそう重要なのは賃銀労働者としての、かれ自身と所有者かつ管理者としての雇主とのあいだの、なお一層大きな分割である。マルクスは「私有財産が人間そのものと合体され、そして人間そのものが私有財産の本質と認められることによって……人間そのものは、ルターの場合に宗教の規定のなかにおかれているのと同様に、私有財産の規定のなかにおかれることになる⁸⁾」と述べたが、工場は企業家のものであり、企業家は労働

者を雇用し生産物を市場で売却し、個人的にその利潤を独占する社会的・法的諸関係・体制のものであった。労働者は財産の非所有者であったし、彼みずからの労働のほかに売るべき何物ももたない哀れな存在でもあった。すなわち「鉄鎖以外に失うべきなもののおももたず」「自己の労働力以外に売るべきなもののおももたない」プロレタリアなのであるとした。だから彼らが生産した生産物に対して、なんら社会的・法的な権利がないからこそ、労働者はみずからの労働生産物から疎外されたのである。工場や機械が資本家に所有されていればこそ、労働者は心理的にも企業の運命と一体化することはできないのである。人間の骨折りの生産物は人間の外化されたもの (man exteriorized) で、それは彼の一部であり、彼の何ほどこを含んでいる。しかし彼の労働の生産物は彼の主人であるように見えて実はそうではない。彼に対立した疎遠な力となり、これが彼によって統御される代りに彼を奴隷にする。つまり「財産所有者をして、他人の労働の果実に貢納を課すことを可能」ならしめる。「労働者は商品をより多くつくればつくるほど、それだけますます彼はより安価な商品となる。事物世界の価値増大 (Verwertung) にびったり比例して、人間世界の価値低下がひどくなる⁹⁾」のであり、繰り返していえば、この事実は労働が生産する対象、つまり労働の生産物がひとつの疎遠な存在として、生産物から独立した力として、労働に対立するということを表現¹⁰⁾するものにほかならぬのである。生産物からの疎外は、当然生産過程における疎外があることを意味する。労働を具現しているところの労働の要具さえも、労働者を支配し労働者に立ち向かい、彼らの生きた労働を汲みほすところの単なるメカニズムとして立向うのである。つまり「労働はある欲求の満足でなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段¹¹⁾」なのであり強いられた労働であり強制労働 (Zwangsarbeit) である。ブラウナーのいうように、働く人びとが「全体との有機的 connection を失い¹²⁾」かつ労働の利潤が個人的に労働者を裨益しないかぎり、エネルギーと知力を駆使して労働すべ

きいかなる動機づけがあるであろうか。

注 1) Blauner, P. 3

2) Daniel Bell ; *The End of Ideology*, Revised Edition, The Free Press, New York, Collier-Macmillan Limited, London, 1962. P. 360.

3) Fromm, *The Art of Loving*, P. 18.

4) ベルは次のように極言している。The most characteristic fact about the American factory worker today is his lack of interest in work. (The End of Ideology, P. 391)

5) K. Jaspers, *Kleine Skule des pkilosophischen Denkens*, S. 41.

6) *ibid.*, S. 49

7) Blauner, P. 32

8) M. E. W. Erg. Bd, S. 530

9) *ibid.*, S. 511.

10) *ibid.*, S. 511

11) *ibid.*, S. 514

12) Blauner, P. 32.

3. Isolation (Social Alienation)

ブラウナーによれば、資本主義の私有財産制度から、かくして第3の分類に属する疎外が帰結される。すなわち疎隔 (isolation) であって「労働者の有機的生産とその目標の体系からの疎隔意識が到来する¹⁾」のである。疎外論は資本制経済制度と現代工場技術が労働者から彼らの仕事への真の人間的關係を奪ったのだと強弁してきた。そして、加うるに専門化 (specialization) が著るしく進歩し、かつ細分化されたため、企業の目標は労働者から全く見喪しなわれ、労働そのものが働く人びとから協同的意味を奪い去ったのである。働く人びとは仕事に同一化することができず、労働は単に衣食のための手段と化す。かくて個人と社会 (職場) の分裂となる。「自己自身から疎隔された労働者は、商品と同時に、物化の形において自己自身をも生産する²⁾」からブラウナーは「isolationとは人間の行動と

動機が個人的ならびに社会的部分の断片になることに基づくのだ³⁾」と述べた。専門人とは自分の専門以外のことはまるで知らない新しい奇妙な人間どもであるが、多くの社会学者たちは疎外が資本主義自体 (capitalism *per se*) の帰結ではなくして、大規模化された組織と現代のあるゆる産業社会を風靡びしているインパーソナルな官僚制機構の結果だと結論しようとする。官僚制は「事務的活動領域における官僚 (書記) による規則と指令のもとづく支配⁴⁾」なのであるが、これはまるで一箇の機械装置なのだ。しかも官僚制は役人流儀と役人根性によって機構を運営していく。この場合官僚制は「官僚の上下の支配関係を通じて何ら建設的具体的理念をもたずに、すべての人を全面的な従属的な状態に押し込める水平化⁵⁾」でしかない。現代産業社会では「官民の官僚主義的機構は互に接触し、驚くべき複雑⁶⁾」さでからみ合い、働く人びとは「組織の全構造によって規定された仕事を、規定された速さ、規定された方法で果す。そのうえ感情⁷⁾さえも規定される」だからブラウナーのいう「the idea of general societal alienation⁸⁾」が生れる。労働過程において「働く人びとは終りのないベルトの上におかれており、労働の創造的活動のような総合的性質はほとんど残されていない。労働者は機械あるいは官僚的組織の附属物となっている⁹⁾」のであって、つまり「彼は彼となることを止めさせられているのであって、ビューローに働く人びとは人間ではない (entmenslicht) のだ¹⁰⁾」いいかえると「the larger social order からの背反のセンスが生れる」のである。「人間はこの常規という網の中で、彼が人間であり、特異な個人であり、希望と失望をもち、悲しみと恐れをもち、愛への熱望や無と分離への恐れを抱いて、このたった一回の生の機会¹¹⁾は、それが与えられたものであること」を忘れさえするであろうし、人間としての全体性を抹殺された人間的部分品の統一体と化す。かくして、かつてゲーテが1825年に機械の世紀を見通して予言したように「神がもはや人類に何らの悦びをもたず、そこで神が創造を新しくやりなおすために、人類をもう一度ほろぼすにちがいない¹²⁾」。

のであり、神は創造をあたらしくやり直す必要をみとめるほど、人間の創造した機械は神の摂理に背反しているのであり、ニーチェの描く時代像（未来像）によると「全生活に影響を及ぼし、その模範となっている機械・大衆の出現とその水平化、そこでは、いっさいが虚偽的となり、何ものももはや真実には通用しないところの生きる糧としての自覚に代る酩酊——¹³⁾《神は死んだ》虚無主義が到来する」のであって、虚無主義が訪れる。「いかなる牧者もなく、ただ群畜あるのみ！ すべてのものが平等を欲求する。そしてまた、すべてのものが平等なのである。別様な考えをうちに感ずるものは、すすんで精神病院に入る」¹⁴⁾ような社会の到来である。ニーチェは「大衆の民主的水平化は人間を小さくする」とし「労働はもはや世界を形成し人間を教養する力ではなくて、焦躁として、また重荷として感じられているにすぎない」¹⁵⁾と述べ「人間性の崩壊するこの世界を嘲笑し《末世人》¹⁶⁾ letzten Menschen の像」を打ち出す。労働に内在する偽りの熱情とかくされたニヒリズムを認識したのは、このような稀有の精神だけである。ニヒリズムは正当な認識と普遍的に拘束する価値の根本否定(grund-sätzliche Leugnung gültiger Erkenntnisse und allgemein verbindlichen Wert) であるが、「信仰の対極たるこのニヒリズムでさえ、結局は可能な信仰、しかも否定された信仰にかかわる以外に存在しない」¹⁷⁾のであり、神性は「根源であり、目標である。それは安らぎである」¹⁸⁾のであって人間は自己を知っている生命であるとすれば、現代の特徴たるニヒリズム、万人に共通なニヒリズムに逃避せざるをえないくらい現代人は isolate されており全く孤独なのである。この疎隔は、はげしい「不安の源」なのである。

現代産業社会では、社会における人びとの価値——信念体系 (Value-Belief-System) は急激に変動し、既存の価値——信念体系は存在価値を失う。新たに発生した新しい価値—信念体系にわれわれが適態できぬ場合には、当然、不調和・不安定・分裂が到来する。デュルケームのいうアノ

ミーであるが、社会不安・危機・個人の絶望とニヒリズムはこうした価値——信念体系の不適応から生れる。このような状況を反映したアノミックな人間は、不安・崩壊感覚・自己喪失感・無力感などにみられるパーソナリティのレベルにおける不適応現象を示す。そして人びとが思考や情緒を圧殺していることは、些細な刺激で意外な昂奮と非合理的行動を生ぜしめるものである。

注 1) Blauner, P. 3

2) Karl Löwith; *Von Hegel zu Nietzsche*, Der vrenolutionäre Bruch im Denken des neunzehnten Jahrhunderts, W. Kohlhammer GmbH, Stuttgart, 1950, S. 299.

3) Blauner, P. 32.

4) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 227.

マックス・ウェーバーはビュロクラシーを第(1)に構成物の目的にとって。必要な規模的活動すなわち公的義務の明確な分配。第(2)に義務の遂行に必要な命令権の明確な分配。第(3)に義務の規則的遂行および。これに対応する権利の行使のための資格ある人員の任命。この三者が近代的な官庁ならびに経営における3つの要素だという鋭い分析を示している。(Max. Weber ; *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1922. S. 650)

5) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschte*, S. 228

6) Mills, *White Collar*, P. 78.

7) Fromm, *The Art of Loving*, 14

8) Blauner, P. 32.

9) Fromm, *The Art of Loving*, P. 14

10) Blauner, P. 32

11) Fromm, *The Art of Loving*, P. 14

12) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 181.

13) *ibid.*, S. 183.

14) *ibid.*, S. 184

15) K. Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche*, S. 311

16) *ibid.*, S. 284

17) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 269.

18) *ibid.*, S. 273

4. Self-estrangement

われわれは以上の疎外概念の展開のほかに、さらに第 4) の分類として self-estrangement が示されねばならない。労働過程が目的のための単なる手段となるということは、働く人びとに現在と未来への分裂を生ぜしめる。かつてマルクスは「人間は彼自身の生活が彼にとって対象なのである。ただこのゆえにのみ、彼の活動は自由な活動なのだ。疎外された労働は、この関係を人間が意識している存在であるからこそ、人間は彼の生命活動、彼の¹⁾自己を、たんに彼の生存のための一手段とならせるというふう¹⁾に逆転させるのだ」と述べたが、雇主は「その人間を彼の労働とともに」買い入れるのであり、働く人びとは目的のためのたんなる道具ないしは手段——1つの商品、1つの物であるから、人間的個性は商業的对象であり、働く人びとにとっては、現在の労働はたんに生活のための、ないしは明日の余暇のための犠牲でしかない。だからこそ、「split between present engagement and future considerations²⁾」とブラウナーはいうわけであって「人間は労働の必要がなくなる度ごとに軽い娯楽へ跳びこむことによって、労働の重荷とまじめさから逃がれてほっと息をつく。労働から娯楽への逃避において労働する人間に休養を求める。労働の焦躁と娯楽欲とは同一事態の両面にすぎない³⁾」ものなのだ。フロムがかって知的で強引でやり手だった、ある実業家の飲酒に耽溺する例を精神分析して、「かれの生活は完全に競争と金儲けとで一杯である。それ以外のことには全く関心がないのである。他人との交際もすべてその目的のためのものである。かれは友達を作り、名声をうることに非常に巧みであったが、心の中では交際しているあらゆる人びと即ち競争者や顧客や雇人などを嫌っている。かれはまた自分が売買する品物にも嫌悪を感じている。金もうけの手段として以

上には何の関心もない⁴⁾」という事実から証明されることは、企業家が強引であればある程、働く人びとは生産行為のなかに創造の喜びは失なわれ、労働は明日の生存のための忍従となり、意識的に企業家に対する嫌悪を抱く以外はない結果となる。ブラウナーは「damaging to self-esteem⁵⁾」と表現したが「野に生える百合を見るより美しいのは、みずからの労働によって必要とするものを克ち得て生活苦の中に却って人間としての品位⁶⁾を確証する人間を見る」どころか、現代企業では「息もつけないような労働の焦躁が伴う。そしてそこには奇怪な精神喪失の状態が拡げ始めているのであって、自己の品位⁷⁾の確証どころか、働く人びとは何か労働している時に自己自身を失わずにいるのではなくて、労働と関係のない間だけ自己自身を失わずに、つまり自由でいる⁷⁾」のであり、だから働く人びとに「現在と未来の分裂」が生れる。さらに現代ではかつてのパーソナルだった対人関係がインパーソナルで形式的な諸関係に変質してしまっている。初期の比較的単純な社会と対照的に、現代では生活のあらゆる面が機械化され、合理化されるが、この傾向はむしろ次第に強烈となる傾向をもつ。現代産業社会は一方では、巨大な都市の団塊を作り大衆社会の肯定的・否定的のあらゆる問題をもたらす。そして巨大な機構は——「この巨大な機構のうちにおかれて、個人としての人間は、過去におけるよりも、もっと多くの連関、それだけにもっと強力な連関によって社会につながられている⁸⁾」のであって、なるほど「人間は多くの面では社会に依存している。しかし人間は一つの原子であり、それがなくても社会は非常にうまくやっていくことができる。このことがすべての相違のもととなっている。この連関は、一方では大へん強力で有機的であるが、他方それは大へん弱い。このことが他人の援助と連帯にたよることが不可能な理由⁹⁾」であり、これは産業社会を支配してるい法則の結果であるから「ひとはこの崩壊の客体であるとともに、主体であり、別言すれば、人間は社会問題に自分を組み込む願望を失い、しだいに彼自身の狭い興味のサークルへと自分自身を閉じ込めて

¹⁰⁾ ゆく」のである。たとえ根本的孤独の底から、われわれはそれに劣らず根本的な絆侶への切望を持とうとも物にかこまれて、ひとりの人間がいるのであり、そしてこれらの物のなかに他の人間たちもいるがゆえに彼は彼らと共にひとりであるのであって「ある人は深い孤独と不安の感じにかられて間断なく仕事をする。また他の人は野心によって、あるいは金銭への欲望によって駆り立てられる。このすべての場合、人は情熱の奴隷となっているのだから、人間の行動は現実においては駆られていることになる」¹¹⁾そして「この点からは受動的といえる。彼は行為者ではなくて受難者である」¹²⁾といえよう。受難者はただ将来への希望によってみずからをみたすしかない。しかし「かれが苦勞に苦勞を重ねたところで、その苦勞を更につづけるのに必要なものが得られないような報いが、どうして彼を刺激するはずであろうか」¹³⁾労働はある欲求の満足ではなくして、労働以外のところで諸欲求をみたすための手段である点に変わりはない。

- 1) M. E. W., Erg. Bd, S. 516.
- 2) Blauner, P. 32,
- 3) K. Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche*, S. 312.
- 4) Erich Fromm; *Psychoanalyse und Religion*, Diana Verlag Konstanz, Zürich, 1966, S. 87.
- 5) Blauner, P. 33.
- 6) K. Löwith, S. 309.
- 7) *ibid.*, SS. 299-300.
- 8) シャフ. 前掲論文. 52頁
- 9) 同書 53頁
- 10) 同書 53頁
- 11) Fromm, *The Art of Loving*, PP. 17-18.
- 12) *ibid.*, P. 18.
- 13) K. Löwith, S. 309.

5. 疎外概念の限界

従来、「疎外」の概念は労働の世界における実り豊かな展望であった

し、将来もあり続けるであろう。信太氏は「疎外の問題が現実¹⁾に提起されてからこのかた、歴史はすでに1世紀を超えている。この問題の未決なままの現段階は、いまやマルクスの疎外論をも突きぬけ、キルケゴールのそれの宗教的レベルをも止揚した広大な地平のなかに入りこんでいる」と述べたが、しかし「疎外」の概念にもおのずから限界があることに注意されねばならない。到底「疎外」概念で個人の労働の内的意義をすべて明解に剔抉することは不可能と言わねばならぬ。「疎外」を以て人間の幸福と労働の間の関係を十全に説明することは不可能である。なぜなら最も疎外されが労働と思われる仕事ですら、必ずしも当人が不幸とっていない場合があり、労働者その人によって嫌われていない場合もある。最も厭うべき労働といえども、生存のための手段でなく、その人にとって目的の場合もある。マルクスの疎外概念にもその観点があるのであって、それは社会的な観点からみられているのであって、個人的な観点は捨象されている。それに、その取扱いはきわめて哲学的である。マルクスのいうところの「労働はある諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない。労働の疎遠性(Fremdheit)は物質上または、その他の強制がなにも存在しなくなるや否や労働がペスト(Pest)のように忌みきらわれるということにはっきり現われてくる²⁾」という思想は個人的観点からなんら実証的ではない。ヴラニツキーは「疎外概念はどれだけの範囲のものを含んでいるのか……疎外は連続的で一面的な過程において克服されるかどうか³⁾」と疑問を投げている。マルクスは「疎外された労働」を論ずるにあたって「国民経済学の諸前提から出発⁴⁾」し、国民経済学にとって法則(Gesetz)として通用する法則が「どのようにして私有財産の本質から生れてくるかを確証しない⁵⁾」といったが、現代資本主義では、ミルズがいったように「自由主義は小資本の是認から出発し、マルクス主義は疎外された労働のプロジェクトから出発している。だがあらゆる労働が本質的には人間性から切りはなされ、小資産も、もはや自由と安定の基礎ではなくなってしまった今日、この2つの哲

学は近代社会の発展を明瞭かつ積極的に分析する基本原理とはなりえない⁶⁾」と述べたが、たしかに「灰色の花を咲かせた」この「装いの科学」を以て世界を分析する基本原理とすることは不可能である。「われわれはジョン・チュアート・ミルにもカール・マルクスにも、その任務は百年前に終了したと宣言せざるをえない⁷⁾」とさえミルズは述べている。さらにミルズは「現代的問題の多くは精神医学の領域に関連しているため、従来にもまして心理学的概念が必要⁸⁾」だとし、心理学的概念の導入を力説しているが、心理学的に言えば、プロレタリアートという階級意識は「たんに集団ナルチシズムにすぎず、」「人間は疎外された形で自己を崇拜するのだ。彼が心酔するその偶像はかれのナルチステックな熱情の対象⁹⁾」にすぎぬ。現代産業社会で働く人びとがこのような階級意識をもっているか否かは疑わしい。また働く人びとがすべて「個人のナルチシズムから集団ナルチシズム¹⁰⁾に変貌」するかどうか疑問である。

またマルクスは「人間の類的本質からの疎外」「人間の人間からの人間の疎外」を論じたが、人間の本質についても論議がつくされなければならぬ。フロムはこの点を次のように指摘している。すなわち「マルクスは人間の歴史的過程において自己創造することを強調し、ある個所では人間の本質は彼らの住む＜社会全体の調和＞以外の何物でもないというようになった。マルクスが人間の本質という概念を棄てず、同時に非歴史的・非進化的概念に屈服することを肯じなかったことは明瞭である。マルクスはこのジレンマを解決できなかった。それゆえ人間の本質の概念について定義づけることはできず、この問題に関する発言はやや曖昧で矛盾あるものにとどまった¹¹⁾」と述べた。このようにフロムも述べるように、要するにマルクス自身、人間の本質という概念自体曖昧で矛盾あるものであった。従って類的本質からの疎外という思想も十分なものとはいえないものと考えられる。

さらに人間は歴史上何度も自己を喪失してきたのであり「人類の歴史は

人間の自己対象化＝疎外とその回復」であるとすれば、自己を喪失することができるということ、そして、そうした喪失感のゆえに再び精神的に自己をみ出そうとすることが出来るということは、他のあらゆる存在者と違う人間の構成要素であった。疎外は人間の悲劇的宿命でもあったが、人間の「輝かしい特権」でもあった。「疎外」はいわゆる社会悪と同義ではない。「ある種の疎外形態は一定の歴史状況のもとにあっては、歴史的発展にとって重要な意味¹²⁾」をもっていたのであり、「これまでの歴史的過程は種々の疎外形態をつくりだす過程とともに、それと同程度に疎外克服をおこなう過程から成り立って¹³⁾」いたわけである。

またマルクスのいう「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義¹⁴⁾」という疎外克服論にも、歴史の現実的な展開をみたとき問題があるのではないかと考えられる。たとえば、「革命と革命的権威とは、ひとびとを……すべての他の疎外形態からも解放することを十分に保証¹⁵⁾」するものと考えたが、ベルによるとマルクスは2つの危険を犯しているという。すなわち「疎外の源泉を私有財産制度にのみ固有化する誤り、とひとたび私有財産制度が廃止されたなら、人間はただちに自由になるだろうという考え方にみられるようなユートピア的理想¹⁶⁾」だと警告している。「社会主義としての社会主義は……積極的な人間の自己意識¹⁷⁾である。共産主義は否定の否定としての肯定であり、それゆえに人間的な解放と回復との、つぎの歴史的発展にとって必然的な現実的契機 (notwendige Moment)) である¹⁷⁾」と無批判的に容認することによって、疎外が「社会主義と両立しないかのように、あたかも社会主義は生れつき、この病気に対する免疫性をもっているかのように¹⁸⁾」考える傾向をもつ。しかし現実的な社会主義が「疎外」に対して生れつき免疫性をもっているとみるならば、かなり問題が残っているようである。現在のところ「地上においては、いかなる理想状態なるものも存在しえない」のであり「いかなる完全な人間も存在しない¹⁹⁾」のである。シャフのいうように「マルクス主義の考え方の流

れにしたがえば、社会主義は定義によっても事実的にも、いかなる既知の疎外をも経済的なそれすらをも、充分に克服することはない²⁰⁾」のであり、

「人間的な解放と回復との、つぎの歴史的発展にとって必然的な現実的契機」とするには必ずしもあたらず、多くの媒介的な未解決の問題が介在する。それゆえ、この「社会主義」をもってわれわれが歴史的現象に全体として究極的に判決をくだすのはあくまで不可能²¹⁾」である。というのは「われわれは裁く神性ではなくして人間であるから²²⁾」でもある。だから「社会思想史上におけるもっとも驚くべき事実のひとつは、マルクスからはじまる社会主義の指導者たちが、その未来社会の輪廓や諸問題について少しも考えずに、あたらしい社会の思想を支持するように多数の民衆を説得しようと努めたこと²³⁾」である。もし「社会主義への移行がまたたく間にすべての災厄を善いものに変え、人間の問題をすべて解決する何か魔法の杖のような²⁴⁾」ものに考えている一派があるとしたならば、それはとんでもないことである。社会主義はけっして、そんな魔法の杖(magic wand)などであるはずがない。社会主義は「疎外された社会から疎外のない社会への跳躍ではない。疎外の問題は社会主義にとって生き生きとした歴史的意義をもつ²⁵⁾」もので、そのような一派にとっては、社会主義とは「無信仰者たちのもつ信仰²⁶⁾」にすぎず、いわば社会的宗教(soziale Religionen)である。革命の翌日には合理性が歴史の舞台に現われて社会の狂気がただち消失にするであろうと考えることこそ狂気ではないか。社会主義社会建設は、すぐには撤廃したり乗り越えたりすることのできない多くの従来の疎外形態の基礎の上に進められていくのである。「新しい条件のもとで、いくつかの疎外現象——たとえば官僚制度、あるいは身体的強制機能など——がさしあたりよりいっそう悪化することを防止できないし、さらには、未知の新しい疎外に直面させられることすらありうる²⁷⁾」のである。いわんやフーリエのいうとおり「社会主義のもとでは人びとの身長は少くとも10フィート高くなる」とかトロツキーの述べたように「社会主義の下では、人間が測

り知れぬほどますます強力賢明，自由になり，その身体は，いままでよりも，もっと調和がとれて釣合い，その動作は一層律動的になり，その声は一層音楽的になり，そしてその姿態は劇的な活動力でみなぎるようになる²⁸⁾」と予言しても，実証性に乏しい。マルクスは「共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり，完成した人間主義として＝自然主義である²⁹⁾」とし，それは「歴史の謎が解かれたもの³⁰⁾」としたが，ヤスパーズは *Enge oder Phantastik im Blick auf die Zukunft* のなかで「われわれはせめて一つの単純な基線 (Grundlinien) でも見たいと思うが，そういう基線は，たえまなく変る刻々の騒ぎよりももっとゆっくり変化する³¹⁾」もので「われわれが自分たちでともに造りだすところの歴史の将来を予見しようとする。将来を規定するもろもろの事実，将来のいろいろな条件や可能性，それらについての認識は完全には解らないものだ。われわれの責任は，このことを洞察するところにある³²⁾」と述べている。つまり「歴史の謎は永久に解けぬ」ものともいえるであろうか。

また現代社会は「静かに社会の舞台に現われた」ホワイト・カラーの数的比率が増大したため，社会を「企業家と賃銀労働者に2分して考えようとする19世紀的な社会観がくつがえされ³³⁾」てしまい，労働における人間疎外もその思考それ自体の変質を迫られるに至ってきた。「プロレタリアートのみが人間性の完全な喪失」だから「この特殊な身分は1種の普遍的の機能をもつ」という前提は疑わしい。スターリン主義などに至っては，「たんにある支配階級と他の支配階級をとりかえた」にすぎない。シャフの予言したとおり，「マルクスが呼んだところの＜生産者の自由な結合＞が経営管理・計画化・生産の道具だての疎外の危険に対して闘うことにおいて，大きな困難に遭遇するだろう³⁴⁾」し，そしてこれらは「安定化への自然的傾向があり，この安定化が疎外の危険をもたらす³⁵⁾」のだと，より新たな人間疎外の必然性を警告している。

注 1) 信太正三「実存と暴力」(『実存主義』1970年，51号，理想社，6頁)

- 2) M. E. W., Erg. Bd, S. 514.
- 3) Predrag Vranicki ; Socialism and the Problem of Alienation, (from; Erich Fromm, *Socialist Humanism an international Symposium*, Allen Lane The Penguin Press, London, 1967, P. 277.)
- 4) M. E. W., Erg. Bd, S.510.
- 5) *ibid.*, S. 510.
- 6) Mills, *White Collar*, introduction.
- 7) *ibid.*, introduction.
- 8) *ibid.*, introduction.
- 9) Erich Fromm ; *Das Menschliche in Uns*, S. 113.
- 10) *ibid.*, S. 138.
- 11) Fromm は、次のように述べている。Auf der anden Seite betonte Marx, daß der Mensch sich im Laufe der Geschichte selbst schaffe, und an einer Stelle geht er sogar so weit zu behaupten, das menschliche Wesen sei nichts anderes als die gesellschaftliche Umwelt in der er lebe. Hieraus geht ganz klar hervor, daß Marx den Begriff von der menschlichen Natur zwar nicht anfechten, andererseits aber nicht zu einer ahistorischen, evolutionsfeindlichen Theorie übergehen wollte. Marx hat, diesen Zweispalt nie gelöst und gelangte folglich auch nicht zu einer Definition der menschlichen Natur ; seine Äußerungen zu diesem Thema deshlb stets vage und widersprüchlich. (S. 149)
- 12) Vranicki, P. 278.
- 13) *ibid.*, P. 278.
- 14) M. E. W., Erg. Ba, S. 536.
- 15) Vranicki., P. 281.
- 16) Bell., *The En of Ideolody*, PP. 360-361.
- 17) M. E. W., Erg. Bd. S. 546.
- 18) Vranicki, P. 281.
- 19) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*. S. 290.
- 20) シヤフ. 前掲論文. 58頁
- 21) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 290.
- 22) *ibid.*, S. 290.
- 23) Bell, *The End of Ideology*, P. 367.

- 24) Vranicki, P. 285.
- 25) *ibid.*, P. 285.
- 26) K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, S. 271.
- 27) シヤフ. 前掲論文. 59頁
- 28) Bell, *The End of Ideology*, P. 275.
- 29) M.E. W., *Erg. Bd.*, S. 536.
- 30) *ibid.*, S. 536.
- 31) K. Jaspers, *Kleine Schule des philosophischen Denkens*, S. 71.
- 32) *ibid.*, S. 71.
- 33) Mills, *White Collar*, introduction.
- 34) シヤフ. 前掲論文. 59頁
- 35) 同書. 59頁

ブラウナーの分類

共通点	分類	分裂形式	成立条件
<div> <div>(existence consciousness との分裂)</div> <div>↓</div> <div>[人間の物化を] 促進</div> </div>	(1) Powerlessness	—主体と客体の分裂—	<p>他人または非人格的組織によってコントロール・操縦される客体としての自己がこの支配を変えたり、制限する主体とはなりえないとき</p> <p>↓</p> <p>対立概念：自由とコントロール</p>
	(2) Meaninglessness	—部分と全体の分裂—	<p>自己の個人的行為が広い life-programm と全く連関がないように思われるとき</p> <p>自己の役割が組織の目標をめざすシステム全体に合致せず、全体とのなんらの有機的連関をもちえないとき</p> <p>↓</p> <p>対立概念； life-plan または組織の全機能および行動が無意味ではなく、有用なものだと理解しうること</p>
	(3) Isolation	—個人と社会の分裂—	<p>大きな社会秩序から離れているという感情をもち、中間にある集合体に対する忠誠心を欠くとき</p> <p>↓</p> <p>対立概念：社会や特殊社会のメンバーたる自覚をもつこと</p>
	(4) Self-estrangement	—現在と未来の分裂—	<p>行為それ自体が目的でなく、目的のための単なる手段となるとき。現在徒事していること未来の関心事との間の分裂</p> <p>↓</p> <p>対立概念：現在時に集中し、自己表現、自己実現を遂行すること。</p>